そそり立つ奇岩遊仙境（那谷寺）

珠玉と石の文化

石山に開かれた白山信仰の拠点とデザイン性豊かな石垣構築技術

問い合わせ　観光交流課　☎24・8076

千三百年の歴史を持つ白山信仰の古刹

碧玉の地層が見られる岩山に開かれ、泰澄大師が「岩屋寺」と名付けた寺、それが那谷寺です。

寺の庭園には碧玉や瑪瑙の飛び石が配され、古くは近隣で採取された瑪瑙が、海外への献上品として取引されていました。

白山信仰の中宮八院や、那谷寺の奥の院である那殿観音なども、凝灰岩の山々に建造されたものが多く、古来より白き岩山が信仰の対象となっていたことをうかがわせます。

▲巨岩の斜面に建つ那殿観音（赤瀬地区）

利常公の城の整備とまちづくり

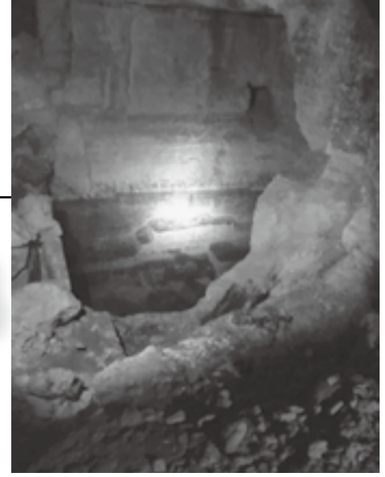
小松のまちづくりは、江戸初期に加賀前田家三代利常公が隠居し、小松に居を構えたことに始まります。

利常公は加賀一向一揆の拠点城であった小松城を大規模に改修し、石垣で区画された城内には多くの水堀と島を配置して、浮き城の景観を持つ名城として生まれ変わらせました。

利常公の城づくりへのこだわりは本丸櫓台の石垣にも表現されています。割石を丁寧に面取り加工し、ブロック状に積み上げる「切込み接ぎ工法」を採用し、色合いの異なった石材をモザイク状に配置することで洗練された美しい意匠を作り出しました。この石垣構築技術は、町家を区画する堀・河川の護岸や橋台にも施されています。

前田家の古文書には、これらの石材が梯川流域の鵜川地区の石切り場から河川を下り、城やまちなかへ運び込まれたことが記されています。

色彩のコントラストが美しい本丸櫓台の石垣



▲地底湖のように水が溜まり、幻想的な光景が見られる鵜川石切り場跡。鵜川石は小松城の石垣に使われた。

▲観音下石（日華石）の石切り場

▲灯籠や墓石などに利用された滝ケ原石の石切り場

近世の石切り場開発

近世のまちづくりが本格化する中、建築部材としての石材需要が高まり、市内では本格的な石切り場の開発が始まりました。現在も市内で多数の石切り場が確認されますが、その多くは、この時期に開かれたものです。

切り出された石は、色調や硬さ、粒子の粗密さなど細部の特質によって使い分けし、門や塀、土台の建築部材、庭の石造彫刻物、信仰用具、生活用具といった様々な用途で利用され、石工技術が定着していきました。

interview

小松城本丸櫓台石垣の不思議

現在、本丸櫓（二層三階）台の石垣は、安全と保守のために天端には登れませんが、四側面は様々なことを物語ってくれています。

その一つに、石垣の北面に井戸があるのをご存知でしょうか。小松城絵図面では「白山水」と記されています。石垣の周りは盛り土があり、井戸のすぐ横の石垣をよく見てみると、約2・5メートルの位置に人工的な穴（□△型）が4カ所開けられています。この不思議な穴は一体何だと思いますか。答えは「ほぞ穴」です。井戸に屋根をかけ、それを支える棟木・梁のほぞ穴として開けられたものです。

ぜひ一度、花見がてらに、石垣の不思議をのぞいてみてはいかがでしょうか。

石垣に開けられた穴

新修 小松市史編纂委員
山前圭佑さん